

発想と創造力を豊かにするための授業の試み

—介護技術「楽しい食事」におけるグループワークの学習効果と課題—

The trial of the class to enrich idea and imagination

— The learning effect of group work in the care skill “happy dining” and subject —

丸 山 順 子

Junko MARUYAMA

南 原 友 枝

Tomoe MINAMIHARA

1. はじめに

介護技術の学習は、介護における生活援助の基礎技術の習得にある。私達も、科学的裏づけのある技術の習得に向け講義、学内演習を行ってきた。まったく知識のない学生に知識、技術を教授することは、必要不可欠である。しかし、多様なニーズをもつ利用者や介護の質の向上を図るために、介護の基礎を講義、演習で教授する授業展開に疑問を感じていた。実際の介護の場では、利用者の状態からアセスメントを行い、ケアプランを作成し、ケース検討を重ね介護を提供するといったなかで習得した介護技術から応用した介護技術が求められる。そのためには、今後、主体的に考え習得する力やチームで追求する過程を踏むことが必要となる。そこで、私達は、この5年間、学生の発想や創造力を養い、主体的に学ぶ姿勢やチームとして行っていくことを育てることを目的にして、「楽しい食事」と「課題学習」のグループワークに取り組んできた。¹⁾

そこで、「楽しい食事」のグループワークでの学習効果・課題について、グループワークの過程、発表内容と学生のアンケートから考察する。

2. 「楽しい食事」の位置付け

介護技術の単元、「食事の援助」の授業展開として、次の通り行った。

講義2コマ(180分)は、5月中旬に行った。内容は、食事の意義、食事の基礎知識、食事摂取の介護の実践などである。

演習2コマは、講義の翌週に行った。ベッド上での仰臥位、片麻痺、嚥下障害、視覚障害の利用者が、お粥、お味噌汁、副菜、うどん、高カロリー補助食品を摂取するという食事介助方法を演習した。

「楽しい食事」のグループワーク5コマは、6月下旬に1期実習(5日間)があり、前後3コマで行い、2コマで発表した。

「楽しい食事」のグループワークの目的は、本来の食事の意味を考え、設定した対象者に「楽しい食事」を考えるもので、学生の自由な発想と創造性を豊かにするであった。発表形式として、ロールプレイを行った。

1. 研究方法

1) 研究期間 ; H16. 5. 14. ~ H17. 1. 12.

「食事の援助技術」の授業実施期間 ; H16. 5. 14. ~ H16. 7. 16.

2) 「楽しい食事」のグループワークの進め方

①オリエンテーション→②グループ毎（4～5名）に対象者、場面設定を決める→③ロールプレイのシナリオ作成と演出のための物品を作成→④発表

3) 評価方法

「楽しい食事」のグループ発表後、アンケートを実施する。アンケートは、選択肢法と自由記述を組み合わせで行った。その内容は、学習の学び、工夫点、食事への認識の変化、グループワークへの参加、「楽しい食事」とは何かを書いてもらった。

自由記述は、内容をカテゴリー化してまとめた。

発表内容とアンケート結果から考察した。

3. 結果

1) グループワークの過程と教員の関わり

「楽しい食事」のオリエンテーションを行った後に、グループワークに入った。教員は、グループワークに参加しながらグループをラウンドした。その際、学生の自由な発想に対し、否定をせず、より自由な発想ができるように促しを行った。内容については、対象者、場面設定を明らかにし、食事内容、食事環境、人間関係等の視点で学生の発想を促した。そして、内容一つ一つに、意味付けを確認しながらグループワークに参加した。また、創作に使う物品を用意し、学生に発表時に視覚的に伝える手段を促した。

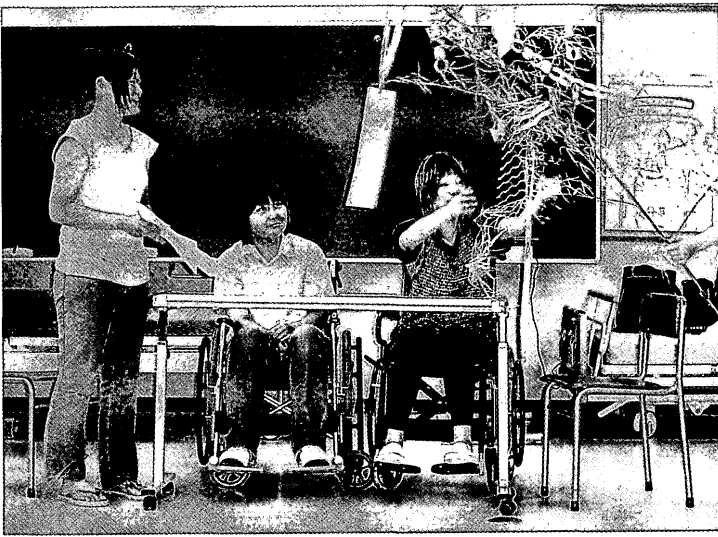
グループワークは1期実習（5日間）をはさみ、3コマで行った。学生は時間が空いたにも関わらず集中して実施できた。

2) 「楽しい食事」のグループワークの発表内容

発表内容は、資料1に示した。対象者は、麻痺がある人、嚥下障害のある人、食欲がない人などであった。場面設定は、行事、外出、旅行、自宅、施設等があった。演出のための創作は、ライターで焦げ目をつけた秋刀魚、きのこ(写真1)、七夕飾り(写真2)、ダンボールで作った流しそうめんの竹とビニール紐で作った流しそうめん(写真3)、輪ゴムと折り紙で作った冷やし中華、ティッシュで形どり、折り紙で作った花畑などであった。また、音楽(CD)や七輪、卓袱台、ござ、すだれ、ゆかたなどを用いたりした。



(写真1)



(写真2)



(写真3)

資料1 グループワーク発表内容

| 場面 設定 | 見所、アピール | 準備 |
|--|--|---|
| 家族との食事 | 「秋」なので・・・紅葉をバックに(家の梅) 栗、きのこ、サンマをメインにしました | 食器、オーバーテーブル 車椅子 |
| 海 | この旅行は参加者の希望をとって行うこととなった 海の家ですいか割りをしてから昼食をする。参加者の希望 で実現した旅行と、施設以外の場所で、利用者が自分の 好きなものを注文するところがみどころ | 和室、卓袱台、 すだれ、皿、台所 |
| 施設で楽しい食事 86歳女性 | 献立を説明し、食事を楽しみにしてもらえよう にした点、好きな音楽を流す、声かけが見所 | 食器、CDプレーヤー |
| 施設、七夕祭り | 家族が来て一緒に食事をすると、メニュー 笹に飾りつけるところ、歌を流す | カセットコーダー、笹 車椅子、食器、机 |
| 草原 | 利用者の方々が楽しく食事をしているところ 利用者の方の希望をとっているところ、ビール など出ないと思いがちですが出たところ | 車椅子 CDプレイヤー お茶 |
| キャンプ場での食事 | 自然のなかで食事をすると、 皆で協力して作る | 車椅子、カセットコーダー 椅子、テーブル、食器 |
| 七夕(お昼) 嚙下障害があり、食欲 もない。希望食をとる ことで食欲が出た | 献立と会話の内容 食事は生活の一部だから、ストレスや苦痛を感じさせては はならない。希望食を含めた要介護者の食欲をそそるよう な食事にした。遠未来型で中国(天津)在住高齢者のため の日本式老人ホームという設定。場所は中国だがスタッフ や要介護者は日本人。日本食。 | 笹、食器、 食器、車椅子。エプロン |
| 施設での昼食 | 自分で食事ができるKさんと、介助が必要なSさんの 食事のとり方。食卓に花を飾る、音楽をかける 介護者が利用者の目線に合わせて座って介助するところ | 車椅子、音楽、食器類 エプロン、おしぼり、オアシス 花瓶 |
| 七夕メニューで夏を 味わおう☆ | 献立の内容を利用者に説明する、すいか割り をしていつもと違う雰囲気味わう、 太巻きと一緒に作ることで楽しさを分かち合う | デッキ、風船、湯のみ、 画紙、新聞紙、エプロン |
| 特養の元旦 お雑煮、おせち料理 デザート、栗 | 普段、施設で出ないおもちゃを切ったり工夫して 出す。おせちはお重で出す。同一施設にいる 家族と一緒に食事をすると | カセットコーダー はし、自助具、ゆのみ お重箱 |
| おやつを作って食べる | すでにできているおやつを食べるのではなく、 手作りおやつということで利用者さんと一緒に 作って食べるところ | 車椅子1、タオル、いす ボール、泡立て器、 |
| 公園で七夕祭り | メニュー、その場で作る手巻き寿司 短冊に書いて飾るところ | 笹、敷物 |
| 自宅 | 介護者の笑顔の対応で、要介護者も笑顔に 和室を使い自宅での介助を表現する | 和室、卓袱台、 すだれ、皿、台所 |
| 夜空の下で 流しそうめんパーティー 自宅の縁側 | 介護者と要介護者の服装 そうめんをとる時、めんの速度 いつもは自分の部屋で食べているが、今回は 自宅の縁側での食事。できたての料理をその 場ですぐに食べていただくところ。 | 車椅子2、ゆかた4、 食器 |
| ピクニック | 右ききだったAさんは事故で右まひに。慣れな い左手での食事のストレスから、介護者の介 助に疑問を感じ次第にこばむようになってきた | 車椅子 模造紙、風船、食器 ビーチボール |
| 右麻痺の平沢さん 81歳、女性 | いつもどおりの食事だと思ったら、実は平沢さ んの誕生日だった | 食器、車椅子2 |
| 65歳鈴木さん女性 8月1日、朝日村出身 右麻痺があり車椅子 在宅、左麻痺で車椅子 使用、ヘルパーが 昼食づくりに訪問 | 鈴木さんに適した環境づくり 風鈴をつける、花を飾る、出身地の野菜使う 食堂にいくまでにメニューの説明 近所に住む娘がやってきて、娘と母親の楽しい 食事を演出 | 車椅子、テーブル、 ラジカセ 車椅子、テーブルクロス、 ラジカセ、イス、テーブル |
| 施設での食事 職員の対応場面 | 献立に注目！、M君とTさんの会話、 悪い対応と良い対応で要介護者の反応が大 きく異なる点に注目 | 食器、ラジカセ |
| お花見 | 施設から外へ出ること、環境が変わり、気持 もリフレッシュして食欲も増す。 | 食器、重箱、コップ ビール瓶 |
| 施設での夏祭り | 夏祭りの楽しい雰囲気と、普段の生活と違う ところ | はちまき、はちまき、ラジカセ、 模造紙、食器 |
| 83歳、脳梗塞で右まひ になった。施設に入る 前は海の男だった | 要介護者の好物を食事に入れた点。衛星管理 に気がつけた所。要介護者が好きな者を選んだ 点。いつもと違った所(海辺)で食べる点 | 食器(コップ、皿、割り箸、 介助皿、スプーン) 机、イス |
| 山田よしえさん82歳が 夕食を食べる場面、右 まひがあり車椅子利用 | 七夕の行事食、短冊をつるすところ、 七夕の歌を歌うところ、星をながめるところ | 車椅子1、笹、カセット CDプレイヤー |

3) 学生の「楽しい食事」での学び

アンケートの回収率は、78.3%であった。

グループワーク3コマのうち、1コマの後に5日間の1期実習があった。ほとんどの学生が、初めて施設での食事援助を体験した。「食事の援助」についての講義や実習を終了後の認識と1期実習を終了してからの認識の変化を表1と資料2に示した。認識の変化として「変わった」「少し変わった」は83.1%であって、「あまり変わらない」「変わらない」は14.4%であった。その認識の変化が、良かった印象をプラス面として「利用者主体」「コミュニケーション」「安全」「大切さ」にカテゴリー化できた。一方、あまり印象がよくないマイナス面として「介護者主体」「対応の悪さ」「楽しくない」「コミュニケーションの欠如」「環境の悪さ」「改善点」にカテゴリー化できた。

それぞれの学生が、違った施設で食事援助の体験をした後、残り2コマを使いグループワークを行い、発表した。グループワークをし、発表を行っての「楽しい食事」認識の変化を表2と資料3に示した。認識の変化として「変わった」「少し変わった」は85.5%であって、「あまり変わらない」「変わらない」は10.8%であった。認識の変化として「工夫」「利用者主体」「介護者の心構え」「コミュニケーション」「グループワークでの学び」がカテゴリー化できた。

「楽しい食事」に大切なこととして書かれた自由記述からは、「利用者主体」「環境づくり」「食事内容」「介護者の心構え」がカテゴリー化できた。(資料4)

初めてのグループワークと発表までの過程について、学生の感想は、「楽しかった」「まあまあ楽しかった」85.0%、「苦痛だった」「ちょっと苦痛だった」14.1%であった。(表3) グループワークの参加については、「積極的に参加できた」「まあまあ参加できた」96.3%、「あまり参加できなかった」「参加できなかった」3.6%であった。(表4) グループ内の取り組み(複数回答)については、「全員の参加ができた」68.7%、「雰囲気良かった」56.6%、「前より仲良くなれた」53.0%が高かった。一方、「人任せにってしまった」12.0%、「協力できないメンバーがいた」8.4%、「自分に負担がかかり大変だった」2.2%であった。(表5) 今後、このようなグループワークを行うことに関しては、「行いたい」「まあ行ってもよい」71.1%、「行いたくない」「あまり行いたくない」28.9%であった。(表6)

表1 1期実習終了後の「食事援助」についての認識の変化

| 項目 | 割合 |
|----------|------|
| 変わった | 36.1 |
| 少し変わった | 47.0 |
| あまり変わらない | 8.4 |
| 変わらない | 6.0 |
| 無回答 | 2.4 |

表2 「楽しい食事」グループ発表後の認識の変化

| 項目 | 割合 |
|----------|------|
| 変わった | 37.3 |
| 少し変わった | 48.2 |
| あまり変わらない | 8.4 |
| 変わらない | 2.4 |
| 無回答 | 3.6 |

表3 グループ学習の感想

| 項目 | 割合 |
|-----------|------|
| 楽しかった | 45.8 |
| まあまあ楽しかった | 39.8 |
| ちょっと苦痛だった | 10.8 |
| 苦痛だった | 3.6 |

表4 グループワークへの参加

| 項目 | 割合 |
|-------------|------|
| 積極的に参加できた | 59.0 |
| まあまあ参加できた | 37.3 |
| あまり参加できなかった | 2.4 |
| 参加できなかった | 1.2 |

表5 グループ内の取り組み

| 項目 | 割合 |
|----------------|------|
| 全員の参加ができた | 68.7 |
| 集中してできた | 28.9 |
| 雰囲気良かった | 56.6 |
| 前より仲良くできた | 53.0 |
| 協力しないメンバーがいた | 8.4 |
| 自分に負担がかかり大変だった | 2.4 |
| 雰囲気が悪くなってしまった | 1.2 |
| 人任せにしてしまった | 12.0 |
| その他 | 0.0 |

表6 今後グループワークの実施

| 項目 | 割合 |
|-------------|------|
| おこなってみたい | 16.9 |
| まあおこなってもよい | 54.2 |
| あまりおこないたくない | 22.9 |
| おこないたくない | 6.0 |

資料2 1期実習終了後(「楽しい食事」のグループワーク実施中)の認識の変化

プラス面

| カテゴリー | 認識の変化内容 | 人数 |
|---------------|--------------------|----|
| 利用者 主体 | ・利用者のペースに合わせる | 10 |
| | ・利用者の思い・気持ちを大切にする | 5 |
| | ・利用者と同じ目線で介助する | 4 |
| | ・スピードより適確さが大切 | |
| | ・気持ちよく食べれるように工夫する | |
| コミュニ ケーション | ・コミュニケーションをとりながら行う | 4 |
| | ・声がけの大切さ | 3 |
| | ・献立から、季節など話題づくりも大切 | |
| | ・献立名をいう | |
| 安全 | ・誤嚥に注意する | |
| | ・安全に介助する | |
| | ・利用者の観察ができるようになった | |
| | ・介助する上で気をつけること | |
| 大変さ | ・一食介助するだけで、大変だった | 3 |
| | ・簡単なものではない | 3 |
| その他 | ・職員の方と一緒に楽しく食べていた | |

マイナス面

| カテゴリー | 認識の変化内容 | 人数 |
|------------------|-------------------------------------|----|
| 介助者 主体 | ・利用者のペースに合わせていない | 9 |
| | ・無理やり食べさせていた。 | 8 |
| | ・おかずとご飯を混ぜて食べていた | 5 |
| | ・複数の人を同時に介助している | 2 |
| | ・一口量が多い | |
| 対応の悪さ | ・立ったまま介助していた | 5 |
| | ・機械的に食べさせていた | 3 |
| | ・ただ食べさせているだけの介助に思えた | 2 |
| | ・エプロンにこぼしたものを介助者が口に入れた | |
| | ・食事介助の対応が悪かった | |
| | ・まさか食事の中に薬を入れるとは思わなかった。 | |
| 楽しくない | ・会話もなく食べていた | 4 |
| | ・利用者がつまらなそうな顔をしていた | 2 |
| | ・「食事」が一日の流れの中のひとつに過ぎなかった。もっと大切にすべき。 | |
| | ・利用者が食事をつらそうにしていた | |
| | ・ただ、もくもくと食事していた | |
| コミュニケー ションの欠如 | ・声かけがあまりなかった | |
| | ・利用者同士の会話がなかった | |
| 環境の悪さ | ・食堂が狭く、廊下で食事をしている | |
| | ・テーブルにないもなく殺風景だった | |
| | ・部屋で食べている人が寂しそうだっ | |
| 改善点 | ・実際は、改善点が多い | |

4. 考察

1) グループ学習の時期に関して

グループワークの期間に1期実習があった。「楽しい食事」のグループワークを5年間行っていたうち、1期実習が間に入っただけは初めてであった。このように計画したことで実習で食事援助の実際を体験するので、「楽しい食事」をイメージしやすいと思われた。しかし、食事の実際を経験してしまったために発想が乏しくなってしまう可能性が生じたので、教員が意識的に学生の豊かな発想を促すように教員側で注意した。

学生は、実習を終えて、施設での生活援助の実際に学ぶことは多い。とりわけ1期実習は初回であり、その体験は、学習していく上で与える影響が大きい。「食事援助」を取ってみても、資料2のように経験内容が違い、学生の認識の変化が著しく違ってくる。

西尾氏も、施設で行われている食事介助に疑問や反発を感じている学生は多いが、その時点で食事介助のどこに問題があるのか明確にできないためにストレスを感じている。要因図を作成する過程で、食事にかかわる要因を整理できたことで、問題を明確に把握することができた、といっている。²⁾ その点においても、今回、1期実習時に、マイナス面に認識された学生も、グループワークから発表後には、資料3、4でプラス面に転じている。「楽しい食事」の発表までの過程で、実習の体験をもとに改めて利用者主体の食事援助について学生同士で考えられたのではないだろうかと考えられる。

2) 「楽しい食事」のグループワークの内容に関して

食の快楽を奪われた施設の高齢者たちと言われるが、食を楽しむことは、介護を含めた生活を楽しみにしていく大きな手がかりとなるといっている。また、介護する側が食を楽しむの一つと思えなければ単なる仕事になってしまう。³⁾

これらを意識しつつ、グループワークでは、教員が、利用者の設定、場面の設定、食事内容、食事環境、人間関係等の観点で学生の発想を促した。そして、その観点一つ一つに、意味付けを確認しながらグループワークは進んでいった。学生は、発想が徐々に広がり、シナリオ作りや演出のための創作活動を積極的に行えた。

柴尾氏は、食事の盛り付け、配慮にセンスがあると心が豊かになる。さらに、利用者が主体という大切にされている気持ちが伝わり満足感を味わうことができる、³⁾ といっている。

学生も、利用者主体で気持ちが伝えられるような内容にするように努力できた。

また、柴尾氏が考える「食生活改善」への指針として「食事環境」「コミュニケーション」「個々の生活リズム」「食の演出」「嚥下困難の食」「厨房改革」「健康管理」「利用者のデマンド」を掲げて「食生活改善」を行っている。³⁾ グループワーク全体が、おおむねこの内容を含んでおり、広い視野でグループワークの発表時に共有できたと思える。特に、アンケートからは、「工夫」「環境づくり」「利用者主体」「介護者の心構え」「コミュニケーション」などに記載が多く、学生が今回のグループワークで特に留意しなければいけないと感じた部分であったと思える。また、これらのカテゴリーは、介護者として直接、利用者に援助できる部分でもある。さらに、この「楽しい食事」は、利用者主体にし、ただ介助され与えられる食事でなく、食事の準備に関わることで楽しみを増したり、選択食で自己決定できたり、学生の中で様々な、発想や創造性が芽生えたのではないかと考えられる。加えて、資料3、4の学生の学

んだ内容でカテゴリー化したものは、講義や演習で学んだことでもある。しかし、これら資料の自由記述で書かれている言葉は、体験を通して学んだ言葉であった。こうして実演することで、よりリアルに具体的な方法や学びとして学生に感じられたのだと思われる。

最近、施設の食生活も徐々に食事の楽しみに向け、様々な工夫を凝らし始めている。益々、この「楽しい食事」で行った柔軟で豊かな発想を生かし、実践していく能力を育てていく必要性が生じている。今回、自由な発想のもとに行ったので、内容的に実施不可能だと思われることも肯定してきた。今後、学生の柔軟な発想を大切にした上で、実行に向けての課題を明らかにする必要があった。また、他職種の協働という部分でも触れていく必要があり、課題となった。

3) 「楽しい食事」のグループワークの効果に関して

水谷氏は、認知症高齢者へのプロトコールには、学生の自発性、創造性、表現力、柔軟性のある判断力などが重要であり、ロールプレイが有効であった報告している。⁴⁾ ロールプレイをすることにより、利用者のことを理解し、どのようにすれば、「楽しい食事」になるのか、グループ内で討議した。この過程は、介護技術が、単にマニュアル思考にならずに、利用者という「個」について食事介助のみならず、習慣、文化、嗜好を理解して上での工夫の過程を体験していく上で効果的だったと思われる。一部には、食事内容や習慣など、自分達の世代の感覚で作られたものがあつた。最近、小中学校で、盛んに「食育」と言われ、学校教育に取り入れつつある。また、学内演習で食器の置き方がわからない学生が多いように、教員が認識している感覚や習慣と違った感覚や習慣がある。今まで、共通認識があるものとして当たり前のように行っていた食生活にも変化が生じていることを自覚して学生と関わらなければならない。

また、初めてのグループワークは、チームワーク確立のためにもグループ内の活動を活発化させ、人間関係を確立する場でもある。今まで、演習での関係は、「私は」であっても、グループ活動を通して「私達は」という関係に発展する機会でもある。⁵⁾ 今回は、表3. 4. 5. 6から楽しく、積極的に行うことができ、また、グループワークを行っても良いと言う感想が多かった。グループ活動を通して、介護のやりがいや楽しさを体験することにより、介護技術の総まとめとしてグループワークで行う課題発表に向けての基盤ができた。¹⁾

おわりに

人生経験豊かで多様なニーズをもつ利用者に、質の良い介護を提供していくことが求められている。求められる介護の質として、「知識・技術・心（態度）」の3要素があり、レベルが高いほど質が良いといえる。⁶⁾ レベルをどのように上げていくかは、学生がいかに主体的に発想豊かに創造的に学習に取り組んでいくにかかっている。それは、同時に教員が、どのような教材を提供するか、どのように学生の実習体験を意味あるものにするにかかっている。

今回のグループワークでグループ討議をし、絵を書いたり、物を作ったりしている学生は、生き生きとしており、楽しんで行っていた。介護の現場にも、レクレーションや余暇活動に通じるものがあつた。生活の質が向上した上で、利用者と楽しむ時間を共有し、対人関係を深めていけるために授業内容や学生との関わりを研鑽していく必要性を感じた。

引用参考文献

- 1) 丸山順子；「主体的な学習活動への取り組みー介護技術に小グループによる課題学習を取り入れてー」松本短期大学紀要、2004
- 2) 西尾孝司；「生活行為介護の視点を豊かにする教育の方法ー食事介護を例としてー、介護教育NO.16、2003
- 3) 柴尾慶次；「食生活改善」への指針、おはよう21増刊、2004
- 4) 水谷成子；「痴呆高齢者のロールプレイングと評価」、介護福祉教育No. 15、2003
- 5) ドナルドR. ウッズ 新道幸恵訳；「PBL(Problem-based learning) 判断能力を高める主体的学習」；2001
- 6) 横尾英子；「介護の質について」介護福祉教育No.15、2003